

中国密教の種子説について —大日経疏を中心に—

藤 谷 厚 生

はじめに

種子説と言えば、瑜伽行唯識学派における種子熏習説を思いあたらせる感がある。勿論、それは唯識学の根本思想である頼耶縁起論を説明する概念として、極めて重要といえる。ところで、今ここで採りあげる種子説とは、密教における種子説（種子の概念）である。それは唯識説での種子を「シュウジ」と読み、密教での種子（字）を「シュジ」と読み慣すように、単に読み方の相違だけで区別されるだけではなく、従来唯識説での種子と密教でのそれとは全く相違した概念として捉えられてきたとも言える。しかし、そういった概念は果たして全く無関係な位置にあり、両者間には何等思想的な影響はないのであろうか。そういった疑問から、本論では特に密教での種子説の特性を、『大日経』¹⁾（大毘盧遮那成佛神変加持経）を中心に、その解釈『大日経疏』²⁾に焦点をあてて考えてみようと思う。

さて、密教は広く仏教思想の中で捉えるとインドでは、大乘仏教の最終期の宗教として成立したものである。しかも、その思想や実践の中には、純粹仏教という形式とはほど遠いような他宗教（ヒンズー教など）の影響が色濃く見うけられる。勿論、そういった点も相俟って密教は、従来仏教学研究の中でも、オーソドックスな仏教学の範疇とは一種異質な研究分野として、取り扱われてきたように思われる。思うにそれは、密教学が所謂真言宗の宗学として、研究されている事に端を発している。言いかえれば、それは弘法大師空海中心の密教とその理解に焦点が当てられた研究論が主流であるからだと言えよう。

確かに、密教では事相と教相とが並修であり、両者は密接な関係があるため、教相のみの研究では真の密教の理解は大変困難であるという難点はある。しかも、その事相は空海によって大成されている以上、どうしても密教研究では、この点を避けて通れないという事情がある。そういった点が相俟て、密教研究は、従来仏教学研究の全体からいえば、他とは一線を画したものである。しかし、密教も仏教思想の一分野である以上、それが仏教思想全体においてどのように位置づけられ、またどのように思想的に成立し展開したのかは、とても興味深いところである。こういった点で、密教研究においては、特にその成立過程を含んで、まだまだ不明確な問題点が多くあるように思われる。

近年、勝又俊教氏は唯識思想と密教との関係を、その思想的変遷の上で明らかにされようとした。特に氏は、密教の五仏（五智）思想を、唯識の転識得智思想との関連の上で、明解にし、その成立に於て唯識思想が重要な役割を占めていることを指摘されている³⁾。このように、密教思想はその成立において、唯識思想の影響を多大に受けているとは言うものの、その詳細に

については未だ解明されていない点がある。

一言に密教といっても、周知のように両部大経という如く、『大日経』と『金剛頂経』の二経によって、その系統が大別される。つまり、この二経典は内容上、思想的にも相違するものであり、それぞれの経典を詳細に検討研究することが、密教の理解につながる訳である。勿論、ここでは両経全般に亘って、そこに見られる種子の意義をとらえることが肝要であるとは思われる。しかし、本稿では就中『大日経』を中心として、その経疏に見られる種子の意義を考えてみようと思う次第である。

1. 大日経とその種子説

さて、『大日経』は8世紀頃(初唐)に善無畏が漢訳し、その弟子一行が記録した7巻36品の経典であり、またこの一行は師の講義したこの経典の註釈として20巻の『大日経疏』を著している。中国・日本ではその後盛んにこの大日経の研究がなされている。我国でも、空海がこの経典を重視したため、密教研究ではこの経典が最重要経典とみなされていたのであるが、私見としてはこの善無畏訳の本経よりは、むしろ一行釈の経疏の方がより重要であると思われる。というのも、歴史的にみてこの経典の解釈は、一行釈の域を出ていないからである。つまり、翻訳に直接携わった一行釈は、正統な大日経解釈と考えられ、大日経を研究するというよりは、一行釈を研究理解することが、即ち大日経の真の研究であると従来されてきたからである。

そういった意味では、中国以後の大日経系密教の実践と思想の成立においては、この一行(683～727)の業績は、絶大なものであると言っても過言ではないといえる。

(1) 『大日経』に見られる種子について

大日経では、種子という語が処々に見られるが、それらを列挙すると⁴⁾、

- (a) 秘密主。是初種子善業發生。復以此為因……中略……彼護戒生天。是第七受用種子。
- (b) 及與因果。諸種子增長。
- (c) 能作如是一切善業種子。
- (d) 布一切種子。善巧以為種。
- (e) 持以鉢字声。勝妙種子字。
- (f) 一切作種子。大福德當知。
- (g) 如法布種子。而以為種子。
- (h) 大精進種子。謂真陀摩尼。
- (i) 佛兩足尊説。阿字名種子。
- (j) 本尊三昧相應者。以心置心為種子。彼応如是自觀察。安住清浄菩提心。
- (k) 以字門觀轉。作本尊身。住瑜伽法運布種子。

などとなる。

さて、ここで簡潔にその特性を挙げると、①種子は善なるものである。(a・c・k) また優れたものである。(e・f・h) ②観法(ヨーガ)として、自心に種子(字)を布置する(種子観)。(d・g・j・k) ③種子は増長する。(b・i) などが言えよう。しかし、これらの記述をよくよく考慮す

ると、どうもここでの種子には、理の側面と事の側面があるということである。つまり、理諦としては自心の内に、能作となる善なる種子がある。(或いは自心に善なる種子をうえつける)ということと、事相としての実践(観法)で、仮に種子の字を自らの心中に布置する(ことで、理の種子に似せる)ということである。この両側面がここでは明らかに見られる。とすると、従来密教の種子説として考えられてきたものは、まさにここでは後者の種子(字)、つまり事相としての種子の意義である。では、前者の理諦から見た種子の意義は、一体どのように理解すればよいのであろうか。私には、むしろここに説かれる善なる種子の特性が、唯識説で説かれる所の種子(無漏種子)に極めて類似しているように思われてならないのである。

(2)『大日経疏』にみられる種子について

では、次に一行釈の経疏の方ではどうであろうか。経疏は20巻という大著であるが、その中にも、先に述べた種子に関する記述が処々に見られる。経疏巻一には、

今修平等三業清浄慧門。一切蘊阿頼耶業寿種子。皆悉梵滅。得至虚空無垢大菩提心。一切如来平等種子。従悲蔵中生法性芽。及至莖葉華果遍満諸法界。成萬徳開敷菩提樹王。……⁵⁾

とあるように、ここでは三密加持の実践によって、五蘊の所依処となる阿頼耶識の中にある諸業の種子(異熟習気)が断滅されることが説かれている。勿論、ここでの文意からすれば、業寿種子とは有漏種子をさしていることが分かる。さらにまた、そういった意味から捉えれば、一切如来平等種子とは正しく平等性智としての無漏種子を示していると考えられるのではなからうか。とすれば、ここでの文意は、唯識説で言うところの見道初地分得のことを表わしていると言える。また、同巻八に

所謂花者。是從慈悲生義。即此浄心種子於大悲胎蔵中。萬行開敷莊嚴佛菩提樹。……⁶⁾

とあるが、こういった文意を含めて考えると、ここにある平等種子・浄心種子(無漏種子)は、むしろ大悲胎蔵(界)より法爾に生じてくることが分かる。

ところで、この大悲胎蔵とは極めて如来蔵的な概念と言えるが、ここにみられる種子の特性は明らかに唯識説的な種子の意義をふまえて用いられていることが分かる。さらに、こういったことは、他の箇所にも見られる。同巻二には、

當知皆是自心實相熏習因縁力也。如最初種子。離微塵許心垢時。即顯如微塵許浄心勢力。雖云善種子生。其實即是不生生。以是堅固性故。在衆生識心終不敗亡。未至自心實際大金剛輪中間。更無住處。離果復成種展轉滋長。然亦不出阿字門。……⁷⁾

とある。ここでもまた熏習・種子などの唯識説独特の用語が見られ、概念においても、ここでの浄心の勢力を持った善の種子は、やはり唯識説で言うところの無漏の種子に符合するのであ

る。

この無漏種子については、『成唯識論』第二巻には、

有諸有情無始時來有無漏種。不由熏習法爾成就。後勝進位熏令增長。無漏法起以此為因。無漏起時復熏成種。……中略……然本有種亦由熏習令其增盛方能得果。……中略……其聞熏習非唯有漏。聞正法時亦熏本有無漏種子。令漸增盛展轉乃至生出世心。故亦說此名聞熏習。．．．⁸⁾

とある。このように無漏種子は、本有・法爾という特性をもっている。確かに、前の一行經疏の文には、本有・法爾などという語句は見られない。しかし、「不生の生」また「堅固性」或いは「衆生の識心に在りて終に敗亡せず」などという言葉は、正にこの本有（法爾）である無漏種子の特性を如実に示す内容として解せるものである。

2. 阿字の聞持とその特性

唯識説では、前の文中にあるように聞熏習（浄法界等流の正法を聞くこと）によって、見道初地に入り無漏慧を発生すると考える訳である。それに対して、密教では聞熏習ということは決して説かれないが、一方で聞持ということによってその特性がみられるように思われる。密教に於ては、真言や陀羅尼は仏の説いた真実の言葉であり、この真言などの真実句を聞き自らの内に持すること（聞持）が、即身成仏の重要な手段と考えている訳である。そういった意味から考えると、まさに密教における三密加持の実践、ここでは特に阿字門（観）の修習（阿字の聞持）が唯識説でいう聞熏習に相応する方法論として重要となってくる訳である。しかも、この阿字観とはまさに種子（字）観であり、自心の内に阿字を観想し、それを修習することにより、究極的には真如を證観し、成仏に到るという観法でもある。従って、ここでの阿字の聞持は、同時に唯識説での聞熏習に対応するものと見てよいと思われる。

[唯識・瑜伽行] 三賢・四善根（凡夫位）→聞熏習→見道初地分得（聖者位）

[密教] 行者（凡夫）→種子の聞持（阿字観・種子観）→即身成仏（聖者）

さて、ここでこの阿字について些か考えるならば、既に大日經にもあるように⁹⁾、阿字は最も重要な種子（字）であり、特に古来阿字本不生というように、不生の種子であり、胎藏界曼荼羅では胎藏界大日如来を表わすものとされている。經疏第十四巻には、

又字輪者。梵音云唵利囉輪。唵利囉是不動義。不動者所謂是阿字菩提心也。如毘盧遮那。住於菩提心體性。種種示現普門利益。種種變現無量無辺。……中略……謂觀種子字也。其觀法如上已具説之。若得見種子字已。即從種子字中而見本尊也¹⁰⁾。

とある。

つまり、ここでは阿字とは菩提心であり、その種子の字（阿字）を観ずることで本尊（大日如来）を見る（法身仏を観得する）ことができると説かれているのである。さらにまた経疏第十一卷には

菩提心為種子。大悲為根。方便為後。此中具説行法也。……中略……淨無比中有種子字。一心正觀此種子字。即是誦彼字也。從此得見其心。又見己身。如本尊体相在佛心中。……中略……本尊清淨離諸分別。劑此名見。菩提之心為初成佛種子也¹¹⁾。

とあるように、菩提心は即ち成仏の種子となっていることも説かれている。また、経疏第十七卷には

然此阿字即同種子。如世間。佛兩足尊説阿字名種子。種子能生多果。一一復生百千萬數。乃至展轉無量不可説也。然見子識果。因既如此。當知果必如之。今此阿字亦如是。從此根本無師自然之智。一切智業從之而生也。・ ・ ・¹²⁾

とある。つまりここでは、阿字を一切智を成ずる能作因としての種子と考えているわけである。ここでこれらを総合すれば、

- (1) 阿字は菩提心であり、成仏（無漏慧）の種子である。
- (2) 阿字を観察することで、究極的には法身（性）を感得することができる。
- (3) 阿字は働きの上で、一切智を生ずる能作因の種子であり、そこから一切智（曼陀羅）が生じる。

このように、ここでは明らかに阿字が根本慧としての種子であり、それは悟りの世界を生起させる潜勢力を有しているものと考えられているのである。

唯識説では、種子生現行といわれるが、種子が現行するということで、現象が生起すると説かれる訳である。しかし、密教では唯識説で言うような現行法は説かれない。けれども、ここにみられる種子（阿字）は、単なる事相面からの観相対象としての文字ではなく、理諦面から考えれば、それは正に根本慧としての種子であり、悟りの世界（曼陀羅の世界）を顕現し、観照せしめる潜勢力と言えものなのである。

ところで、曼陀羅は密教においては、悟りの世界であり、仏・菩薩の集座する菩提場である。勿論、それは種子によって転じ変現せられる仏界でもある。では、こういった仏界は、逆に唯識説ではどのように意義づけられているのであろうか。『成唯識論』第九卷には、

菩薩得此二見道時。生如来家。住極喜地。善達法界。得諸平等。常生諸佛大集會中。於多百門已得自在。自知不久證大菩提。能尽未來利樂一切。・ ・ ・¹³⁾

とある。この文意からも分かるように、菩薩（行者）が見道に入る時には「如来の家に生じ」て「平等（性智）を得て、常に諸仏の大集會中に生ず」という訳で、この諸仏の大集會の世界こそは、

密教の曼陀羅の世界そのものであり、菩薩が見道（通達位）に入って体得される境地そのものを表わしているといえるものである。

おわりに

以上のことから分かるように、『大日経疏』で説かれる種子は、事相面から言えば、それは観法の実践としての種子（字）である。しかし、その種子の概念は正に唯識で言うところの無漏慧の種子に相当するものとして考えられるものである。そして、それは特に一行自身が、大日経の種子説を解釈する上で、新訳唯識の種子説の概念を巧妙に採り入れることで、密教独自の種子説を確立せしめているような感がある。勿論、本稿では特に一行の『大日経疏』を中心に考えた訳であり、広く密教全般を考えるならば、一方で『金剛頂経』系の金剛界密教においても、その種子の特性を考える必要があるように思われる。

しかし例えば、不空訳の『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』にも、

當證無量三昧耶無量陀羅尼門。以不思議法。能變易弟子俱生我執法執種子。應時集得身中一大阿僧祇劫所集福德智慧。則為生在佛家。其人從一切如來心生。・ ・ ・

とあるように、唯識説で説くところの俱生起の我執・法執の有漏種子を断じて無漏への変易が明らかにここでは述べられており、またこの続きの箇所にも、

纔見曼荼羅。能須臾頃淨信。以歡喜心瞻觀故。則於阿頼耶識中種金剛界種子。具受灌頂受職金剛名号。從此已後。受得廣大甚深不思議法。・ ・ ・¹⁴⁾

とあるように、ここでは阿頼耶識に生じる無漏慧の種子を「金剛界の種子」という密教的なタームに置き換えて意味づけている訳である。さらに、同書の別の箇所にも、

金剛慢者。是大精進波羅蜜。住無礙解脫。於無辺如來広作佛事。及作衆生利益。欲金剛持金剛弓箭。射阿頼耶識中一切有漏種子。成大円鏡智。・ ・ ・¹⁵⁾

とあるように、唯識説で説かれる一切の有漏種子を断滅して、最後に大円鏡智を成ずる転識得智説を引用しており、明らかに金剛頂経の不空訳自身にも新訳唯識の種子説を以って、その種子説を解釈し意義づけていることが分かる。このように、中国密教の成立に当って、その種子説には唯識学説の種子説が、極めて巧妙に採り入れられていることは重要であると言える。

思うに、中国密教が成立する正にその直前の時期は、玄奘が新訳の唯識論をもたらし、唐代の性相学が隆盛を極めた時代でもあった。そういった点から考えれば、一行や不空等の学匠は勿論その当時の他宗の教学をも大いに研鑽し、これを以て自らの教学を意義づけようとしたことであろう。こういった時代背景のもと、中国密教は、他宗の影響を大いに受けつつも、密教

独自の教相（学）を確立し体系化するのである。

密教の成仏論として、一般に即身成仏と言うことが言われる。しかし、本稿で述べたように、その即身成仏の実践としての、三密加持・阿字観（種子観）は、実は自らの善（無漏）の種子を生起させ、即見道初地に直入するという瑜伽行でもあり、正にそこに密教で説く即身成仏の特異性が発揮されていると言っても過言ではあるまい。

本稿では、就中密教における種子説を唯識学説における種子説との関係性を中心にして私見を述べた。勿論、密教の思想には如来蔵思想を初めとし、他の多大な影響が見られる訳である。そういった点もふまえて、今後密教思想を他の教学との関係性において、大いに研究する余地はある訳であるが、同時にそれは密教成立の多くの課題を解明する上で、重要な意義を持つものとする次第である。

[注]

- 1) 大正大蔵経（以下大正）第18巻所載。
- 2) 大正第39巻所載。
- 3) 『唯識思想と密教』勝又俊教（春秋社） p 147以下参照。
- 4) (a) 大正第18巻 p 2、中段所載。
(b) 同巻 p 21、上段所載。
(c) 同巻 p 21、下段所載。
(d) 同巻 p 34、中段所載。
(e) 同巻 p 34、中段所載。
(f) 同巻 p 34、下段所載。
(g) 同巻 p 35、中段所載。
(h) 同巻 p 35、下段所載。
(i) 同巻 p 38、中段所載。
(j) 同巻 p 51、中段所載。
(k) 同巻 p 52、下段所載。
- 5) 大正第39巻 p 584、中段所載。
- 6) 大正第38巻 p 660、上段所載。
- 7) 大正第38巻 p 596、上段所載。
- 8) 新導本『成唯識論』第2巻 p 21、2行目～8行目所載。
- 9) 本稿、注4) の箇所参照。
- 10) 大正第39巻 p 725、上・中段所載。
- 11) 大正第39巻 p 696、上・中段所載。
- 12) 大正第39巻 p 754、中段所載。
- 13) 新導本『成唯識論』第9巻、p 19所載。
- 14) 大正第20巻 p 535、下段所載。
- 15) 大正第20巻 p 538、中段所載。